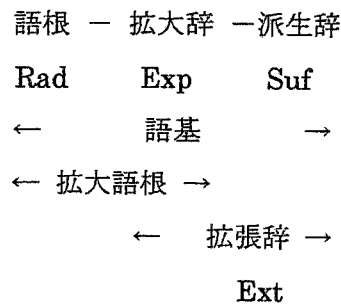


5.3. 語基

動詞の意味を決定する要素は、動詞語根、拡大辞、派生辞である。これらをまとめて「語基」と呼ぶ。これらの要素は、機能や振る舞いによって、さらに以下のような単位に分けることができる。



-bútukil-「追いかける」という動詞は、「走る」という基本的意味を表わす-bútuk-と、「～に向かって」という意味を付与する派生辞 -il- に分けられる。-bútuk-「走る」は、意味の上ではこれ以上分割できない単位であるが、構成要素としては、さらに -bút- と -uk- という2つの要素に分けることができる。前者は語根(Rad)、後者は拡大辞(Exp)である。拡大辞はすべての動詞に現われるわけではないが、語根とともにその動詞の基本的意味を表わす要素である。

- | | |
|--|---|
| <p>① -bág - a 「配る」
Rad - F</p> | <p>② -bág - ad₃ - a 「ふるえる」
Rad - Exp - F</p> |
| <p>③ -gól - ol - a 「食器を洗う」
Rad - Exp - F</p> | <p>④ -gól - ok - a 「飛ぶ」
Rad - Exp - F</p> |

①と②、③と④はそれぞれ語根だけを見れば同じであるが、それぞれの単語間に意味的関連があるわけではない。拡大辞がついていない①の場合は、その基本的意味を語根が表わしているのに対し、拡大辞がついている②では「語根—拡大辞」が基本的意味を表わしている。③、④の場合も②と同様に、その基本的意味は「語根—拡大辞」が表わしている。

拡大辞は、それ自体が特定の意味を持っているわけではなく、意味の上では語根とは分割できない。従って形態論的には、これらは分けるべきではないとも考えられ、現に語根と拡大辞をひとつの要素として扱うバンツ—諸語研究者も多い。しかしながら、語根と拡大辞の間には以下のような振る舞いの違いが見られる。

- I) 語根は常に同じ形で現われるが、拡大辞は母音調和を起こす
 II) 語根は独自の声調を有するが、拡大辞は独自の声調を有していない

これらの違いから、本論文では語根と拡大辞を分けて考えることにする。語根に拡大辞がついた形を「拡大語根」と呼ぶ。動詞の基本的意味を表わす単位として「語根あるいは拡大語根」を意味する場合には「(拡大)語根」と表わす。(拡大)語根に直接語尾が付く形、すなわち派生辞の付かない動詞を「動詞の基本形」と呼ぶ。

拡大辞の振る舞いは、むしろ派生辞と似ている。派生辞とは、(拡大)語根と語尾の間に現われ、(拡大)語根が表わしている動詞の基本的意味に一定の意味を付与する要素である。拡大辞が独自の意味をもっていないことは先に述べたとおりであるが、「一定の意味を付与する」という点で、派生辞と拡大辞とは機能がはっきりと異なっている。しかしながら、これらの要素はいずれも語根と語尾の間に現われる要素であり、形態や振る舞いも似ているため、区別が難しい場合が多い。両方が現われる場合には、拡大辞は常に派生辞より前に位置するが、すべての動詞に拡大辞と派生辞の両方がついていてわけではない。また、これらの要素はどちらも、ひとつの動詞語根に複数付加することができる。さらに、派生形が付かない形(基本形)が存在しないもの、あるいは派生辞の本来の意味が薄れてきているもの、派生形が固定化していて派生辞をはずせないものなどもあり、拡大辞と拡張辞の区別をより困難にしている。本論文では、語根と語尾の間に現われる要素である拡大辞と派生辞をあわせて「拡張辞(ext)」と呼ぶことにする。また派生辞が付かない「動詞の基本形」に対して、派生辞のついた形を「動詞の派生形」と呼ぶ。本論文の例文では、特に必要がなければ、拡大語根は分割しないで表わしているが、この節の例文は、語根、拡大辞、派生辞を、ハイフンで区切って示す。また、5.3.2., 5.3.3., 5.3.4.に挙げる分析文では、ハイフンで区切ってあっても、母音調和を起こした表層形を記す。

5.3.1. 語根

動詞語根の音節構造は、C(S)V, C(S)V(N)C(S)である。以下これらの具体例をあげる。

	語根	語根+基本語尾 -a	
CV	- bé -	- ba	「存在する」
	- p'é -	- pa	「飲む」
CSV	- hjé-	- hjea	「人よりたくさん取る」
	- pjó-	- pjoa	「あたためる」

CVC1	-baǵ-	-baga	「分ける」
	-súl-	-sula	「水に入る」
CVC2	-lá-	-laa	「向ける」
	-ké-	-kea	「こする」
	-pí-	-pia	「出す」
CVNC	-téng-	-tenga	「束ねる」
	-kúnd-	-kunda	「こする」
CVCS	-bégw-	-begwa	「熟す」
	-súkw-	-sukwa	「飽きる」
CSVC	-lwál-	-lwala	「苦しむ」
	-hjág-	-hjaga	「粉にする」
CVNCS	-héngw-	-hengwa	「水が透き通る」
CSVNC	-kwánd-	-kwanda	「ひっかく」
	-njónǵ-	-njonga	「ねじる」

CVは、語尾がついた場合の現われ方を見ると、語根がCだけのように見える。しかしながら、この動詞語根に適用形派生辞 *-il-*（機能については5.4.4参照）を付けると、それぞれ以下のような形で現われる。

	基本形	適用形
1) -ba	dʒubíle dʒu-bV-íle 「彼はそこにいる」	dʒugubêíle dʒu-gu-bV-il-ile 「彼は君の代わりにそこにいる」
2) -pa	dʒupíle dʒu-pV-íle 「彼は飲んだ」	dʒugupêíle dʒu-gu-pV-il-ile 「彼は君の代わりに飲んだ」

適用形の派生辞 *-il-* は、動詞語根の母音と母音調和を起こす。動詞語根の母音が *e*, *o* であれば適用形派生辞は *-el-*, 動詞語根の母音が *e*, *o* であれば適用形派生辞は *-el-* で現われる。例 1 を見ると、派生辞が母音調和を起こして *-el-* で現われているので、動詞語根には母音 *e* か *o* があるはずである。ただし、もしそこに *o* があるのであれば、語尾 *-ile-* が直後に来た場合に、その *o* は半母音化するはずであるが、例 1 には半母音化された跡はなく、語尾の母音に融合している。従って例 1 の動詞語根は *-be-* であると考えられる。例 2 についても同様に考えると、派生辞が母音調和を起こして *-el-* で現われていることから、動詞語根は *-je-* であることがわかる。ただし、これらの動詞は、語根頭の子音の前に /*ku*/ を挿入して、*-kuC-* (つまり、CVC) という語根をもつ動詞として扱われることが多い。

<i>-je-</i>	「飲む」		
		CV 語根	kuC 語根
語根	:	<i>-je-</i>	<i>-kún-</i>
不定形	:	<i>kú-ja</i>	<i>kú-kupa</i>
「君は水を飲むだろう」	:	<i>gwíja mási</i> (<i>gu-í-je-a</i>)	<i>gwíkupa mási</i> (<i>gu-í-kún-a</i>)

さて CVC2 に分類した動詞語根は、CV の動詞語根と同じ音節構造であるが、動詞語根の母音が語尾の母音に融合されることなく現われている。通時的に見ると、これらの間には違いがある。Häfliger (1909) を見ると、本論文で CVC2 に分類している語根は、すべて語根 CV の後ろに /*h*/ がある。/*h*/ が語根頭以外の環境では発音されないことが多いことは 3.1.2.3. で述べたとおりで、現在でも、*-báha* [*bá:ha*] ~ [*bá:a*] 「数える」、*-kósha* [*kó:ha*] ~ [*kó:a*] 「火をおこす」のようにゆれがあるものもある。このことから、CVC2 に属する語根は、本来語根末に /*h*/ があつたが、それが発音されないことで定着したと思われる。つまり CVC2 は、現在は CV という音節構造で現われているが、本来は CVC であつた語根である。

同様の理由で、CSV に分類した動詞語根も、本来の音節構造が CSV であつた可能性もある。しかしながら、語尾と融合してしまう CSV の例がないために、比較することができない。語根 CSV の場合には、CVC2 の場合のように語根末の /*h*/ が発音されないことで定着したわけではなく、半母音があることで母音の融合が止められているとも考えら

れる¹⁰。従って、この動詞語根に関しては、現在の現われ方である CSV として扱うことにする。

CSV の S は、/w/, /j/ のいずれも位置することができるが、CVCS の S は /w/ に限られる。また、語根頭の音節が CSV の場合には、語根末に CS は来ない。

動詞語根の中には、以下のように語根を重複させるものがある。

-hómbahomb-	「飛び跳ねる」
-núkajuk-	「ゆれる」
-hónahon-	「物をたたいて音を出す」
-pélambel-	「ゆれる」
-lélandel-	「椅子などがぐらぐらする」

これらの語根は、基本語尾の -a を間に挟んで CV(N)C という語幹が繰り返されている。語根頭の子音が無声閉鎖音の場合には、繰り返される際に、後ろに位置する語根頭の子音の前に子音と同調音点の鼻音が入り、続く閉鎖音は有声化する。

バンツー祖語の語根には、H と L の声調の対立があったと考えられている (Guthrie 1967-1971)。現在タンザニアで話されているバンツー諸語の中にも、ハヤ (Haya) 語、スクマ (Sukuma) 語、ニランバ (Nilamba) 語、サンバー (Shambaa) 語などのように、この対立を保っているものもある (湯川 1995)。しかしながら、マテング語の動詞語根はこの対立を失っており、動詞語根の基底声調はすべて H である (5.7.参照)。

5.3.2. 拡大辞

拡大辞の音節構造は V あるいは V(N)C である。拡大辞は、意味的には語根とは切り離すことのできない要素であり、常に語根の直後に現われる。拡大辞を切り離して他の語根に付加したり、別の拡大辞と交替させたりすることはできない。従って、拡大辞の現われ方からは、それが本来の形態なのか、母音調和の結果なのかを知ることは難しい。

そこで後ろに非完了語尾 -adze を続けてみる。この語尾が付加されると、その直前に位置する拡張辞の母音調和はキャンセルされる (5.5.3.3.参照)。例えば、-twél-el-「賑わう」と -d3ég-el-「注ぐ」の拡大辞はどちらも -el- で現われているが、これらに非完了語尾を続けてみると、以下のように違いが出てくる。

¹⁰ 他の接辞の場合を見ても、CSV という音節構造の接辞 (あるいは接辞が結合した結果 CSV になったもの) の直後に母音が続いた場合で、重なった母音が融合する例はない。

3) -twél-el- 「賑わう」

džitwélilǎdʒe

dʒi - twél - il - ádʒe

「それ(家)は賑わった」

S(9) - Rad - Exp - 語尾

4) -dʒég-el- 「注ぐ」

dʒudʒégalǎdʒe

dʒu - dʒég - al - ádʒe

「彼は注いだ」

S3sg - Rad - Exp - 語尾

非完了語尾をつけることによって母音調和がキャンセルされると、-twél-el-「賑わう」の拡大辞は -il-が母音調和を起こしたものであり、-dʒég-el-「注ぐ」の拡大辞は -al-が母音調和を起こしたものであることが明らかになる。

このようにして、具体的には下に示したような拡大辞が確認されている。段落を下げているものは、母音調和して現われている例である。2つの拡大辞が重なっている例は、ひとつめの拡大辞の下に分類した。なお「？」を付したものは、後述する母音調和の規則から外れている例である。

-a-	-páp-a-	「さわる」	
-ab-	-tínd-ab-al-	「ひざまづく」	
	-dʒél-ab-an-	「目を開ける」	
-adʒ-	-bág-adʒ-	「震える」	
-ag-	-kánd-ag-ul-	「汚いものを踏んでしまう」	
-ɔg-	-kól-ɔg-	「かき回す」	
-ak-	-hín-ak-al-il-	「耐える」	
-ek-	-kél-ek-	「灰を通してソーダ状にする」	
-ɛk-	-tél-ek-	「料理する」	
-al-	-bámb-al-	「平らに歩く」	
	-kómb-al-	「やせる」	?
	-túmb-al-	「静かになる」	?
	-húmb-al-	「初潮をむかえる」	?
-il-	-píl-il-	「黒ずむ」	
-el-	-dʒég-el-	「注ぐ」	
-el-	-hém-el-	「買う」	

-am-	-bál-am-	「横木を組む」	
	-dzín-am-	「腰をかがめる」	?
-im-	-kíl-im-	「床をならす」	
-em-	-kék-em-	「怒鳴る」	
-um-	-búl-um-	「とどろく」	
-om-	-kól-om-	「いびきをかく」	
-amb-	-tál-amb-ul-	「ほどく」	
-an-	-líng-an-	「だます」	?
	-dzógw-an-	「従う」	?
	-póg-an-	「よろめく」	?
-en-	-mém-en-	「咀嚼する」	
-and-	-kán-and-	「卵をかえす」	
-und-	-púm-und-	「脱穀する」	
-ond-	-kón-ond-	「ノックする」	
-andz-	-súk-andz-uk-	「口をすすぐ」	
-ondz-	-sók-ondz-	「ねだる」	
-ang-	-bál-ang-	「数える」	
	-lím-ang-	「殴る」	?
-ing-	-híl-ing-	「巻く」	
-ung-	-búl-ung-	「丸まる」	
-aj-	-tín-aj-ul-	「もみつぶす」	
-uj-	-núg-uj-	「口の中で味わう」	
-ap- ¹¹	-kól-ap-al-	「太る」	
-at-	-pág-at-	「抱く」	
	-húb-at-	「ほおぼる」	?
	-híp-at-	「握り締める」	?
-et-	-pék-et-	「幹に傷をつける」	

¹¹ 形容詞からの派生で以下のような動詞があるが、これらは形容詞語根に p がついたのであって、拡大辞 -ap- が母音調和したものとは区別する。

-nénep - 「太い」 (<nene), -lásup - 「長い」 (<lasu), -dzógop - 「恐がる」

-ut-	-púk-ut-	「首を縦にふる」
-ot-	-kóg-ot-	「鍋の焦付きをかきとる」
-uk-	-hjét-uk-	「またぐ」
-ok-	-pót-ok-	「居眠りをする」
-ok-	-džóm-ok-	「終わる」
-ul-	-híg-ul-	「初めて使う」
-ol-	-hóg-ol-	「漏れる」
-ol-	-kóm-ol-	「咳をする」
-ung-	-tál-ung-	「またぐ」
-ut-	-ŋám-ut-	「寝言を言う」
-ik-		
-ek-	-kéŋg-ek-	「抱く」
-ek-	-džóŋg-ek-	「付け足す」
-il-	-džám-il-	「大声をだす」
-el-	-twél-el-	「賑わう」
-el-	-lób-el-	「酔う」
-imb-	-kól-imb-	「裏声を出す」

拡大辞によっては現われる回数や場所が限られていて、母音調和の起こり方を確認できる例がないものもあるが、拡大辞の母音調和は、おおよそ次のようにまとめられる。

拡大辞の母音調和

拡大辞の母音が / i / の場合

-il-, -ik-

語根の母音が e, o の場合 e

語根の母音が ε, ɔ の場合 ɔ

-imb-

母音調和しない

拡大辞の母音が / u / の場合

語根の母音が o の場合 o

語根の母音が ɔ の場合 ɔ

拡大辞の母音が /a/ の場合

-at-, -am-, -ag-, -aj-, -and-, -andz-, -ang- 語根と同じ母音
-a-, -ab-, -ad3-, -amb-, -ap- 不明
-ak-, -al-, -an-	語根の母音が u, o, ɔ の場合 母音調和しない
	語根の母音が i, e, ɛ の場合 動詞語根と同じ母音

ただし -am-, -an-, -ang-, -at- には、「?」を付けたもののように母音調和を起こさない場合がある。

5.3.3. 派生辞

先に述べたとおり、拡大辞と派生辞は区別がつきにくい。そこで派生辞を以下のように定義し、語根と語尾の間に位置する要素のうち、これに当てはまるものを本論文では派生辞として扱うことにする。

- ① (拡大) 語根がもつ基本的意味に一定の意味を付与する要素
- ② 基本形は明らかではないが、同じ位置で他の派生辞と入れ替えが可能な要素

マテング語には次のような派生辞がある。

-an-	相互形
-alil-	強意形
-as-	使役形
-il-	適用形
-uk-	自動詞形 1
-ik-	自動詞形 2
-al-	自動詞形 3
-at-	自動詞形 4
-ul-	他動詞形 1
-il-	他動詞形 2
-i-	他動詞形 3
-u-	他動詞形 4

派生辞の母音は以下のように動詞語根の母音と調和する。

◆ 派生辞の母音が / u / の場合

語根の母音が o の場合 …… o

語根の母音が ɔ の場合 …… ɔ

-uk- : 自動詞形派生辞 1

-dʒím-uk-	「起きる」
-hjék-uk-	「覆いがはずれる」
-gélam-uk-	「溢れる」
-táb-uk-	「別れる」
-túmb-uk-	「始まる」
-hóg-ok-	「水から出る」
-dʒóm-ɔk-	「終わる」

-ul- : 他動詞形派生辞 1

-híb-ul-	「栓を開ける」
-hjék-ul-	「覆いをはずす」
-bál-ul-	「裂く」
-tún-ul-	「折る」
-hóp-ol-	「引き抜く」
-bóp-ɔl-	「ほどく」

◆ 派生辞の母音が / i / の場合

語根の母音が e, o の場合 …… e

語根の母音が ε, ɔ の場合 …… ε

-ik- : 自動詞形派生辞 2

-tín-ik-	「こげる」
-pénd-ek-	「曲がる」
-dʒán-ik-	「乾かす」
-húl-ik-	「脱げる」
-dʒób-ek-	「はがれる」
-lómb-ɔk-	「(橋を) 渡す」

-il- : 適用形派生辞

-hín-il-	「～のために踊る」
-lél-el-	「～のせいで泣く」
-héng-el-	「～の代わりに働く」
-pámb-il-	「～のために飾る」
-húb-il-	「～の代わりに汚れをとる」
-d3ób-el-	「雨をよける」
-tóm-el-	「～の代わりに味見する」

◆ 派生辞の母音が / a/ の場合

語根の母音と同じになる。ただし、-an-は母音調和を起こさない。

-al- : 自動詞形派生辞 3

-d3íng-il-	「入る」
-d3éndz-el-	「ぶら下がる」
-hég-el-	「離れる」

-at- : 自動詞形派生辞 4

-híng-al-it-	「転がる」
-hjóng-al-ot-	「まわる」

派生辞が母音の直後に続く場合は、派生辞の前に / k / が入る。さらに、派生辞の子音が / l / であれば、多くの場合その / l / は脱落する。母音調和は語根が子音で終わっている場合と同じである。ただし語根の音節構造が CV (5.3.1.参照) の場合はこの限りではなく、語根の母音と派生辞の母音が融合する (p127 参照)。また / l / は脱落も起こらない。

- 5) -nánambu- 「ひっくり返す」 + -il- → -nán-amb-u-kil- / -nán-amb-u-ki-
 6) -bé- 「沸かす」 + -il- → -bé-kel- / -bé-ke-
 7) -lá- 「見せる」 + -an- → -lá-kan-

自動詞形、他動詞形、強意形、使役形の派生辞は、互いにひとつの動詞内に共起できないが、相互形と適用形の派生辞は他の派生辞と共起することができる。その場合の派生辞の順序は以下のようなになる。

(拡大) 語根 - 自他の派生辞 / 強意形 / 使役形 - 相互形 - 適応形 - 語尾

- 8) -kádʒ - ul - an - il - a -kádʒulanila 「～の代理で粉々に割る」
 Rad 他 相 適 F

5.3.4. 拡張辞の母音調和

拡大辞と派生辞の母音調和については、それぞれのところすでに述べたが、ここでは、母音調和に関して両方に共通する事柄について述べる。

語根の母音が前舌母音の場合には、-il-と-al-, -ik-と-ak- は、それぞれ母音調和の結果同じ現われ方になってしまう。動詞の意味から判断できる場合もあるが、多くの場合、特に拡大辞の場合には、非完了語尾をつけたときの母音の現われ方で区別するしかない。しかしながら、-il-と-al-, -ik-と-ak- の間でゆれのあるものも、少なからずある。

- 9) -dʒíp-at-il- 「短い」 → lu - dʒíp - at - il - ádʒɛ

/ lu - dʒíp - at - al - ádʒɛ

- 10) -sép-el- 「足が不自由になる」 → dʒu - sép - il - ádʒɛ / dʒu - sép - al - ádaʒɛ

- 11) -hím-ik- 「地に突き刺す」 → dʒu - hím - ik - ádʒɛ / dʒu - hím - ak - ádʒɛ

- 12) -dʒél-ek- 「重ねる」 → dʒu - dʒél - ik - ádʒɛ / dʒu - dʒél - ak - ádʒɛ

拡大辞も派生辞も、それぞれ動詞語根の母音と母音調和を起こすが、ひとつの動詞語根に複数の拡張辞が付加される場合、母音調和を起こすのは語尾の直前に位置する拡張辞だけで、その他の拡張辞の母音調和はキャンセルされる。以下、拡張辞の母音がキャンセルされる例をあげる。() 内は不定形である。

- 13) -hém - el- 「買う」 → -hém - al - ɛs - 「売る」
 Rad Exp (kúhemela) Rad Exp 使 (kúhemalesa)

→ -hém - al - as - el - 「～のために売る」
 Rad Exp 使 適 (kúhemalaseła)

cf. dʒu - hém - al - ádzɛ 「彼は買った」
S3sg - Rad - Exp - 非完 F

dʒu - hém - al - as - ádzɛ 「彼は売った」
S3sg - Rad - Exp - 使 - 非完 F

14) -hót - ɔl - 「突く」 → -hót - ul - an - 「何度も突く」
Rad Exp (kúhɔtɔla) Rad Exp 相 (kúhɔtulana)

cf. dʒu - hót - ul - ádzɛ 「彼は突いた」
S3sg - Rad - Exp - 非完 F

15) -kól - ɔg - 「まぜる」 → -kól - ag - an - 「何度もかき混ぜる」
Rad Exp (kúkloga) Rad Exp 相 (kúkɔlagana)

cf. dʒu - kól - ag - ádzɛ 「彼はまぜた」
S3sg - Rad - Exp - 非完 F

例 13～15 の例に見られるように、拡張辞の後ろに別の拡張辞が続いた場合、前に位置する拡張辞の母音に変化する。この変化した母音の現われ方は、非完了語尾 -adzɛ が付いて母音調和がキャンセルされた場合の母音の現われ方と同じである。つまり拡張辞の後ろに別の拡張辞が続いた場合には、前に位置する拡張辞の母音調和がキャンセルされている。結果的に語尾の直前に位置する拡張辞のみが語根の母音と母音調和を起こすことになる。例 13 では、語尾の直前に位置する使役形派生辞 -as- がその前にある -el- で現われていた拡大辞の母音調和をキャンセルさせ、かつ -as- 自体は語根の母音と母音調和を起こして -es- となっている。例 14, 15 では、-ɔl-, -ag- という形で現われていた拡大辞が、相互形の派生辞 -an- が後ろに続くことによって母音調和がキャンセルされ、それぞれ -ul-, -ag- という本来の形で現われている。-an- は母音調和を起こさない性質を持つため (p124 参照)、そのままの形で現われている。

ただし例外がある。母音が /i/ の拡張辞が 2 つ重なった場合には、前に位置する拡張辞の母音は母音調和がキャンセルされた後も /a/ で現われる。

- 16) -bút - uk - 「走る」 + -il- → -bút - uk - il - 「追いかける」
 Rad Exp Rad Exp 適1
- bút - uk - il - + -il- → -bút - uk - il - il -
 Rad Exp 適1 適2
 → -bút - uk - al - il -
 「～のために追いかける」
- 17) -džán - ik - 「乾かす」 + -il- → -džán - ik - il -
 Rad 自 Rad 自 適
 → -džán - ak - il - 「～のために乾かす」
- 18) -džéndz - e - 「つるす」 + -il- → -džéndz - i - kel -
 Rad 他 Rad 他 適
 → -džéndz - a - kel - 「～のためにつるす」

例16の「追いかける」は、「走る」-bút-uk-に適用形派生辞 -il- (適用形①) をつけて表わされるが、そこにさらに適用形派生辞 -il- (適用形②) をつけて「～のために」という意味を加える。その場合、適用形は本来であれば -il- で現われるはずであるが、後ろにもうひとつ -il- という派生辞が続くことで実際には -al- で現われる。例18が示すように、母音調和が起こって実際の現われでは /i/ が重ならない場合でも、前に位置する拡張辞の母音は /a/ で現われる。この規則から考えると、先にあげた強意形派生辞 -alil- や、常に後ろに -il- を伴なって現われる拡大辞 -ab- は、本来の形がそれぞれ -ilil-, -ib- である可能性がある。